

日本の技術力は大丈夫だろうか。日本企業は技術力を維持して世界に伍してゆけるのだろうか。企業が提供する製品やサービスは技術を基礎にして開発され、製造され、利用者に提供されるが、技術力の低下は、企業の国際競争力低下にまで及んでいないか。事態はさらに深刻である。未来の技術を担うべき若者の「理科離れ」「技術離れ」が進行し、また、声高にその指摘がなされて久しいのに、一向に事態が改善する兆しはない。このままでは日本企業の技術水準は下がり、先進各国との競争に敗れるだけでなく、技術力もどんどん低下してゆくのではないか。

2006年度から、国際大学 GLOCOM では、有力企業の CTO（最高技術責任者）や CTO 経験者を中心とするメンバーで、日本の技術競争力に焦点を合わせて議論を続けてきた。われわれの間では「CTO ラウンドテーブル」と呼んでいる。担当の異動などによってメンバーは一部、入れ替わってきた。原則的に、随時、新しいメンバーが加入し、従来のメンバーはそのまま残るという形で、徐々に充実してきている。

我々の課題は、なぜ日本企業、日本社会の技術力が低下して来たのか。その原因はどこにあるのか。原因が分かったとして、それを克服することができるのか。できるとしたら、どのような方策によってか——など、多様で、議論も収れんすることなく、展開するのに任せてきている。いずれ、強い方向性を作り出して、提言として世に問うつもりであるが、まだ、メンバーの合意する「日本技術大国への道」をまとめるには至っていない。

一口に技術と言っても、中身は幅広い。さまざまな商品分野に波及する基礎技術や製品を開発する要素技術、高品質な製品を作る製造技術、コストを徹底的に抑える生産技術、全体を効果的に運用する管理技術など一概には論じられない幅の広さである。われわれの4年間の議論を通じて、そうした幅の広さを勘案しても、日本の技術力が低下し、日本企業の国際競争力を弱めるファクターとして機能する場面が多くなっていることが指摘された。特に、初年度では、日本がその技術を国際標準に仕立て上げてゆく方策の未熟さが俎上に上った。一部の例外を除くと標準化に失敗したこと、あるいは、海外企業に標準を握られることによって劣勢に陥ったことなどが認識された。また、教育分野での技術軽視の現状や明るい希望がもちにくくなった技術の現場の問題点も深く議論的になった。

4年目になる2009年度はグローバル化やオープンイノベーションへの対応、人材育成について5回にわたり議論し、最後に、メンバー以外の GLOCOM 関係者にも呼び掛けて公開の場で議論を続けた。メンバーや各回のテーマについては、別紙のとおりである。

この議論を踏まえて、さらに多くの見識を集め、遠くないうちに「日本の技術力を復活させる道」という太い道をまとめてみたいと思っている。

参加してくれた多くのメンバーに感謝するとともに、さらに、困難な議論を踏み固めながら、次の一步へと、ともに踏み出してくれることをお願いしたい。本報告書は、そのスタートの号砲としたい。

2010年3月

中島 洋

CTO ラウンドテーブル主査／国際大学 GLOCOM 教授